

# 千潟京ノ坪遺跡

—福岡県小郡市千潟所在薩摩街道千潟野越堤の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第318集

2018

小郡市教育委員会



# 千潟京ノ坪遺跡

—福岡県小郡市千潟所在薩摩街道千潟野越堤の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第318集

2018

小郡市教育委員会



## 序文

本書は、干潟京ノ坪遺跡で発見された薩摩街道干潟野越堤の発掘調査報告書です。薩摩街道干潟野越堤は、小郡市干潟地内における県道拡幅工事中に不時発見され、小郡市教育委員会が平成28年度に埋蔵文化財発掘調査を実施しました。この道路は、地域住民の生活道、通学路として利用されており、今回の調査の実施によって、多くの方々にご不便をおかけしましたこと、心よりお詫び申し上げるとともに、遺跡保存へご理解、ご協力いただきましたことを心より感謝いたします。

今回の発掘調査では、江戸時代、小郡市を南北に通る参勤交代道であった薩摩街道の一部と、薩摩街道を補強するように造られた石組堤防である干潟野越堤が確認されました。小郡市内の治水、利水の構造物は、1647年に造られた「稲吉堰」が知られていますが、今回発見された薩摩街道干潟野越堤も、水害対策を目的とした土木遺産であり、当時の人々の自然災害に対する考え方、付き合い方をうかがい知ることができます。

本書に示されている資料が学術研究はもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを望みますとともに、当文化財が地域の財産として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、多くの方々のご理解とご協力を頂き、本書の発刊にいたりましたこと、厚く感謝の意を表します。

平成30年3月30日

小郡市教育委員会  
教育長 清武輝

## 例言

1. 本書は、県道久留米筑紫野線の拡幅工事に伴い、小郡市教育委員会が平成28年度から29年度にかけて実施した干潟京ノ坪遺跡の発掘調査記録である。
2. 干潟京ノ坪遺跡の発掘調査は、県道拡幅工事によって不時発見され、小郡市干潟の515.5m<sup>2</sup>において調査を実施した。
3. 遺構の実測については、主に龍孝明が行い、全体図の作成は株式会社バスコに委託した。製図は株式会社バスコが行ったものを宮崎美穂子、龍が加筆・修正した。
4. 遺構の写真撮影は龍が行い、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。
5. 遺物実測は龍が行い、製図は久住愛子が行った。
6. 遺構図中の方位は座標北を示し、全体図中の座標は世界測地系第II系による。
7. 遺物、実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
8. 本書の執筆は龍が行った。

## <本文目次>

第1章 調査の経過と組織	1
1. 調査の経過	
2. 組織	
第2章 位置と環境	2
第3章 遺跡の概要	6
1. 概要	
2. 部分名称	
3. 調査の方法	
第4章 遺構と遺物	7
1. 薩摩街道干潟野越堤	
2. トレンチ	
第5章 まとめ	15

## <挿図目次>

第1図 市内遺跡分布図・調査区位置図 (S=1/25,000、調査区位置図は S=1/2,500)	
第2図 薩摩街道干潟野越堤模式図・石組実測図	
第3図 薩摩街道干潟野越堤実測図 (S=1/250)	
第4図 薩摩街道干潟野越堤トレンチ A・F 土層図 (S=1/60)	
第5図 薩摩街道干潟野越堤トレンチ B・C 土層図 (S=1/60)	
第6図 薩摩街道干潟野越堤トレンチ D・E 土層図 (S=1/60)	
第7図 薩摩街道干潟野越堤石組実測図 (S=1/40)	
第8図 干潟京ノ坪遺跡出土土器実測図 (S=1/4)	
第9図 小都市周辺の主要街道および地形・水系図 (S=1/60,000)	

## <図版目次>

図版 1 薩摩街道干潟野越堤全景	
図版 2 1. 調査区遠景（草場川上流を望む）	図版 6 1. トレンチ D 土層
2. 霧堤（南から）	2. トレンチ E 土層
図版 3 1. 石組全景（南から）	3. 撥乱（西から）
2. 石組全景（北から）	4. 緩衝部（北から）
図版 4 1. 馬踏全景（南から）	5. 石組北端部（北から）
2. 馬踏全景（北から）	6. 馬踏（北から）
図版 5 1・2 トレンチ A 土層	図版 7 墓書
3・4 トレンチ B 土層	図版 8 墓書
5・6 トレンチ C 土層	図版 9 墓書
	図版 10 矢穴・削岩ドリル痕
	図版 11 出土遺物

# 第1章 調査の経過と組織

## 1. 調査の経過

干潟京ノ坪遺跡の発掘調査は、平成28年10月18日付で県道久留米筑紫野線の拡幅工事中に石垣状遺構発見の連絡が文化財課にあったことに端を発する。この連絡を受けて、文化財課は現地確認調査を実施し、大規模な石垣遺構を確認した。石垣に見られる矢穴の規模と形状、一部は布積みで、近世に見られる石組み構造であることが明らかとなった。さらに、当該地が薩摩街道上に位置することから、薩摩街道に関連する遺構と判断し、工事を実施していた福岡県久留米県土整備事務所に工事中止を依頼する運びとなった。調査の経過を以下に記す。

- 10月18日 不時発見報告。掘削の一時中止を依頼。協議を行う  
10月20日 内容確認のため、試掘調査、石垣検出、図面作成を実施  
11月11日 調査着手  
12月5日 NTT立会のもと、アスファルト剥ぎを実施。東側斜面の掘削にかかる  
12月12日 搅乱からコンクリート製の土管検出  
1月6日 東側の崩落した石材を撤去。表土剥ぎを行う  
3月1日 掘削作業完了、空撮、測量開始、レベル移動  
3月18日 地元住民を対象とした現地説明会を実施  
3月21日 トレンチ埋め戻し、石垣復旧作業を開始  
3月31日 石垣復旧完了、完全撤収

## 2. 組織

調査の組織は以下のとおり。

<平成28年度>		<平成29年度>	
小都市教育委員会	教育長 清武 輝	小都市教育委員会	教育長 清武 輝
教育部	部長 山下博文	教育部	部長 山下博文
文化財課	課長 片岡宏二	文化財課	課長 柏原孝俊
	係長 柏原孝俊		係長 杉本岳史
	技師 龍 孝明		技師 龍 孝明

薩摩街道干潟野越堤の調査にあたっては、次の方々に指導・助言を賜った。また、福岡県教育庁総務部文化財保護課には、先生の紹介、文化庁調査官の視察等、調査の協力をいただいた。文末ながら深謝いたします。

- 壹岐裕志（小都市文化財保護審議会委員）  
帆足徳男（小都市文化財保護審議会委員）  
西谷正（九州大学名誉教授）  
林重徳（佐賀大学名誉教授）  
土田充義（鹿児島大学名誉教授）  
高瀬哲郎（石垣技術研究機構代表）  
林博徳（九州大学工学研究院助教）

## 第2章 位置と環境

福岡県は九州本島の北部に位置し、関門海峡を隔てて本州西端に隣接する。周防灘・響灘・玄界灘・有明海の4つの海に面し、それぞれ瀬戸内海、日本海、東シナ海へとつながることから、古代より日本と大陸とを結ぶ行政、交通の要衝であった。現在の県域は明治9年（1876）に福岡・三潴・小倉三県の合併により成立した。小郡市は、福岡県の中央部、佐賀県鳥栖市、基山町と接し、筑後平野の北端付近に位置している。北側には二日市地狭帯をはさみ、太宰府、博多へと通じており、古来より筑前と筑後、肥前を結ぶ交通の要衝であり、文化的にも重要な位置にある。市の北西部から西部にかけては、背振山系から派生する丘陵が連なり、三国丘陵と呼ばれる。地質は花崗岩風化土で浸食されやすいため、各所に雨水などによる浸食で谷部が形成されている。市内中央部付近を筑後川の支流である宝満川が南北に貫流しており、多くの小河川がこれに流れ込んでいる。これら河川によって形成された広大な平野部が市の東・南部に形成されている。

歴史的環境のうち中世以前は他の報告書に詳しいため、ここでは割愛し、近世以降の小郡について中心に述べる。

豊臣秀吉による天正15年（1587）の九州仕置により、筑後川以北の御原郡（現小郡市と大刀洗町の大部分）、御井郡（現小郡市、大刀洗町、久留米市的一部分）は、豊臣氏の蔵入地となった。この時期の北筑後に関する史料は僅少であるが、『筑紫古文書』の『筑紫良泰筑紫家由緒書』によると、小郡市域は小早川内記秀包（ひでかね）が領した。文禄4年（1595）には筑前名島城城主小早川秀俊に加増されたが、慶長5年（1600）関ヶ原の戦で備前国岡山へと加増転封されたことにより、小郡市域は、関ヶ原で石田三成をとらえた功により、筑後一円32万5千石の朱印を得て、慶長6年（1602）柳川城へ入った田中吉政の所領となる。元和6年（1620）二代田中忠政のとき断続するが、翌年有馬豊氏が久留米城に入封した。

二代藩主忠頼には、長らく嫡子ができなかったため、豊範を養子として迎え入れることとなる。しかし、承応元年（1652）には、後に三代藩主となる順利、その後、承応3年（1654）には、後の四代藩主頼元が生まれた。寛文8年（1668）、豊範は、御原郡35ヶ村のうち19ヶ村一万石余を松崎領として分封される。実子の誕生による豊範への配慮が表向きの理由となっているが、藩政をめぐる家臣団の対立が背景にあることが指摘されている。豊範は、松崎に居館を構え、松崎宿の整備にも着手し、街道を新しく開通させるなど、松崎藩の体制を整えていく。

寛文9年（1669）には、丹羽頼母などによって、陣屋（以下、「松崎館」という）候補地が選ばれ、同年、久留米藩江戸家老であった有馬正盛によって決定するが、松崎館建設と町場整備は遅れ、「町場縄張」は寛文11年（1671）に、松崎館建設は、寛文11年から13年の間と想定されている※3。なお、県立三井高校南側に「城近堤」と呼ばれる池があり、松崎館推定地が周辺に想定される。平成9年（1997）、福岡県教育委員会により、三井高校プール建設予定地で「松崎城跡」の発掘調査が実施され、小規模ながら松崎館に関わると考えられる溝や瓦が確認されている※4。

豊範は、延宝8年（1680）、江戸寺社奉行へ願い、京都南禅寺の住持僧を招いて三潴郡西牟田の靈鷲寺を移転した。江戸滞在中の貞享元年（1684年）、突然の改易処分を受け、領地を没収されたことにより、松崎藩は取り潰しなった。分封からわずか16年のことであった。翌年、松崎館は破却され、松が植えられたと伝えられる。旧松崎領は、幕府直轄地となるが、元禄10年（1697）久留米藩に返地された。

松崎宿は、南北に構口を設け、本陣、脇本陣を置き、宿役として、人足10人、馬10匹、駕籠10丁を常時備えていた。松崎宿の町別当を務めた井上家に伝わる「慶応元年十一月 宿役主法ニ付品々調子帳

松崎町」によると、幕末には129軒の建物があり、その内26軒が旅籠を営んでいたことが記されている。街道沿いには多くの恵比寿像が建立されており、宿場町の性格を表している。また、多くの飯盛女がいたこともわかっている。松崎宿は、薩摩街道、秋月街道、日田街道と主要街道が交差する交通の要衝であり、かつ、筑後国北辺に位置することから、松崎藩解体後も宿場町、繁華街として繁栄していたことがうかがえる。明治2年、関所と五街道、脇街道の宿駅制度が廃止される。久留米藩は宿駅制度を統けていたが、明治4年の廢藩置県によって、久留米県となると、藩内の番所が廃止され、城下町と郡部との間にあった門も取り外され、人びとの自由な往来が可能となった。この結果、旧街道の利用者減少に伴い、松崎宿も衰退していくことになった。

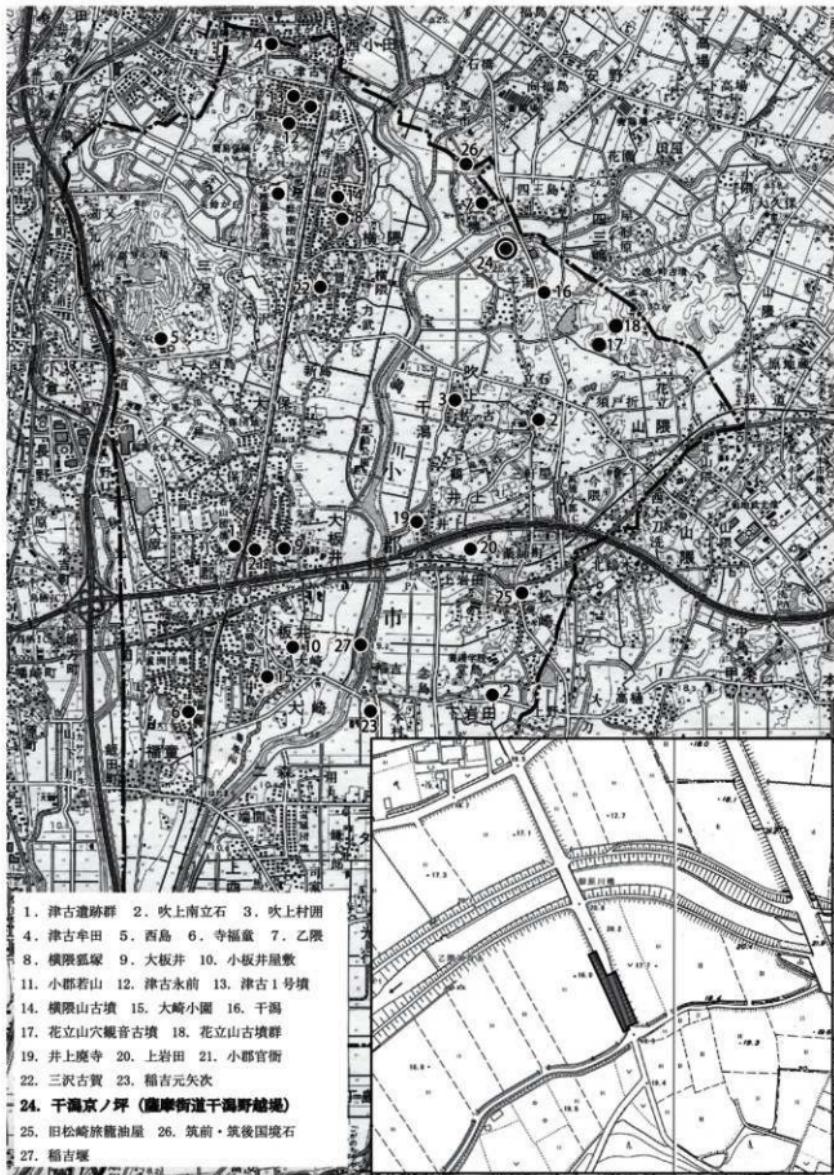
### 小郡の道

久留米藩領内では、近世初期より主要道や生活道、年貢運送道など様々な道路網が整備されていった。小倉と唯一の対外貿易港であった長崎出島とを結ぶ長崎街道が小郡市域の北西側を通り、北側を日田街道が通る。長崎街道の筑前山家から分岐して、津古へ入り、横隈、久留米、大善寺を経て柳川領へ至る横隈街道（筑前街道・柳川街道などとも呼ばれる）が当初の「往還」であった。「筑後国変地其外相改目録」によると、延宝6年（1678）には、筑前山家宿の手前で日田街道から分岐し、松崎宿、府中宿、羽大塚宿、瀬高宿を通り薩摩へ至る「往還」薩摩街道（松崎街道）が開設したことに伴い、それまでの「往還」横隈街道は廃止された。

一方、長崎街道の田代宿からは、当市域を横断するように秋月街道（彦山道）が続いており、八町峠を越え、小倉へと繋がる。久留米藩主の參勤道は、元禄期以前は、久留米、宮地から古賀で松崎街道に入り、平方から本郷へ抜け、八町越えを経由するものであった。平方は、本郷方面から八町越えへの追分である。元禄15年（1702）以降、福岡藩主黒田氏と久留米藩主有馬氏の不和から、參勤交代道は本郷経由の八町峠越えから、平方を北上し、松崎・乙隈経由の冷水峠越えに変更された。このことにより、松崎から乙隈を経由する薩摩街道の重要度が増していくことが想定される。こうした往還の整備に伴い、街道筋には一里塚や櫻、松、櫟等の一里木、立場茶屋の整備が行なわれ、国境には境界線を示す「国界標」、「境界石」が、街道沿いには「道標石」などが設けられた。

### 用水と灌漑

ここで、地勢に目を向けると、宝満川水系の扇状地域としての低湿平地のある当市域は、水害の常襲地域であった。特に小郡市域南部は、筑後川水位の上昇による宝満川・大刀洗川およびその支流への逆流など、複合的な要因によって、被害が生じたようである。一方で、水源のない地域も多く、干ばつの発生も多かったようである。元禄4年（1691）からの『豆田井手水論』にも見られるように、水の獲得をめぐる争いも絶えなかった。さらに、久留米藩は、久留米城普請や城下町の建設に加え、寛永5年（1628）の大坂城普請、同7年（1630）の江戸城二の丸普請、同14～15年の島原一揆への出兵と出費が増加し、連年のように続く洪水、飢餓、蝗害などによって、財政難に陥っていた。承応4年（1655）、三代藩主頼利は、年貢の増徴を行うべく、井堰を設け、灌漑による畑地の水田への転換、開墾による耕地の増加を図り、筑後川においては、明暦元年（1655）に三瀬郡北酒見大堰が完成。寛文4年（1664）生葉郡大石村に梁瀬井堰、長野水道を築造、延宝4年（1676）には、同郡原口村瀬ノ瀬の井堰による灌漑が行な



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1 / 50,000)

われるなど、耕作地拡大を図るための副次的産物として、治水、利水の構造物が各所に築造された。筑後川に流れ込む宝満川（当時の名称は「得川」）においても、久留米藩初期から用水事業が行なわれた。この用水事業に画期的な業績を挙げたのは、普請奉行丹羽頼母（にわたのも）重次（1586 - 1681）である。頼母は、尾張国丹羽郡の生まれで、その先祖は尾張国丹羽郡河内城主であった丹羽新左衛門である。頼母は、元和年間（1615 - 1624）に有馬豊氏に仕えた。寛永12年（1635）には江戸城平河口の修築、日光東照宮の營繕などを行っており、延宝2年（1674）2月に老来職を辞するまで、久留米藩の渠溝、堰堤、護岸工事等の治水事業に従事していた。肥後の加藤清正（1562 - 1611）をはじめ、佐賀藩の成富兵庫茂安（1560 - 1634）、柳川藩の田尻紇馬、田中吉政（～1609）と並び、治水事業の大家であった。頼母は、正保4年（1647）に久留米藩主有馬豊氏により、稻吉堰の築造が命じられると、郡奉行鈴村弥次右衛門、草野次郎右衛門、用丸組高松大庄屋の協力を得て、稻吉堰の築設を行った。頼母が久留米藩で最初に着手した利水事業である。その際、上岩田の老松宮、井上庵寺の巨石、礎石を利用し、宝満川88間（約160m）を塞き止め、堰の上流には越水の場所を設け、洪水被害を減少させる工法をとったと伝えられる。稻吉堰の築造により、690町歩余の水田ができ、貞享4年（1687）には、完全な石堰に改修された。そのほか、三瀬郡中島村（現久留米市安武町）における慶安元年（1648）の荒籠築造、承応元年（1652）の三瀬郡草場村（現三瀬町）に築造された荒籠はその規模と堅固であることから、頼母荒籠と呼ばれた。頼母は、寛文9年（1669）、竹野郡早田村に霞堤工法を採用し、水害防除を図った。この霞堤工法は、洪水流を調整し、被害を抑える工法として、乗越堤（野越堤）とともに藩政時代に採用されたものである。このように筑後川本流の用水施設の設置、取水体系の確立は、経緯や経過も含め明らかにされているが、本流以外の水源については、記録がほとんどなく、明らかとなっていない。

「米府紀事略」によると、当市域には、三国堰や草堰の夫婦橋堰、端間堰などが築かれたが、これらの堰により、端間から上流へは、舟を上げることができず、水運は端間堰から下流で行なわれた。そのため、端間は川港として機能することとなり、幕末には藩の米蔵である郷場が設けられた。

## 参考文献

- 『筑後河北史』 p.196
- 『久留米市史』 第2巻p727
- 『小都市史』 第二巻p.407
- 森井啓次 1997『松崎城跡』福岡県文化財調査報告書第135集
- 佐藤雄史 2008『旧松崎旅籠油屋』小都市文化財調査報告書第234集

## 第3章 調査の概要

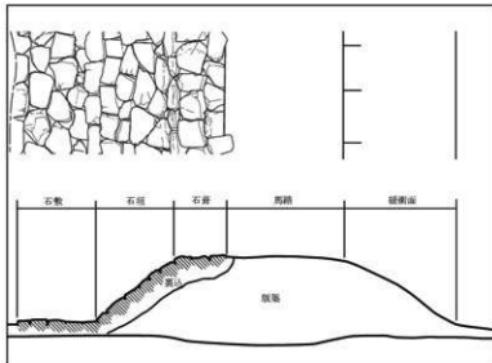
### 1. 概要

干潟京ノ坪遺跡は、福岡県小郡市干潟地内に所在する。当地は、小郡市干潟と草場川を挟んで北側に位置する乙隈を結ぶ薩摩街道上に位置する。本遺跡では薩摩街道と街道を洪水被害から守るための野越堤が確認された。

干潟野越堤は総延長90mにおよぶと考えられ、調査は90.9mの範囲で実施した。土層から少なくとも過去2回以上決壟したと考えられる。当初構築部分は粗削石布積みが見られ、修繕箇所は落とし積である。矢穴の規模から、当時の構築時期は江戸時代中期から後期と考えられる。また、石材には削岩ドリルの跡が見られることから、近代まで補修が行なわれていたようである。

### 2. 部分名称

野越堤は「のこし」、「のごし」、「乗越堤（のりこしてい）」、あるいは「越流堤（えつりゅうてい）」と呼ばれる。本書では、調査当初に設定した「野越（のごし）堤」とする。本文中に使用する部分名称については、第2図のとおりとする。断面の上辺である天端部分、露出した路面を馬踏、天端の石敷きを石葺、斜面上の石積みを石積、下面の石敷きを石敷とする。これら石葺、石積、石敷を合わせて石組とする。上流側に当たる傾斜面を緩衝部とする。



第2図 薩摩街道干潟野越堤模式図

### 3. 調査の方法

調査は、干潟野越堤の石組、馬踏の検出を中心に行い、一部搅乱の掘削、トレンチ調査による土層断面確認調査を行った。

測量調査は、トータルステーションおよび3次元計測機器を用いて実施し、点群処理および図面作成を行なった。

## 第4章 遺構と遺物

### 1. 薩摩街道干渉野越堤

薩摩街道干渉野越堤は、薩摩街道の西側法面に石組を設置し、野越堤の役割を兼ね備えた構造物である。南側は、工事に先立つ地盤調査の際、約11mに渡り石組が撤去されているものの、遺存状態は極めて良好である。

#### 1) 規模・形態

全長は、確認された範囲で84.3mを測る。南側は調査区外へと延びるが、交差点のアスファルト下に位置するため調査が不可能であり、南側端部は明らかにできていない。ただし、最長で南側用水路に接する箇所までと考えられる。北側は、調査区を延長し、端部の検出に至った。ここから推定される全長は約90.3mである。馬踏の標高は18.25m前後を測る。

構造は、第2図の模式図に示すとおり、通行路となる馬踏と西側斜面に構築される石組からなる。馬踏は、地山を一部掘り下げ、粘土と砂の版築で築成される。礫等の混入は見られず、非常に丁寧な造りである。石組は、花崗岩を1辺30～65cm程度に整形しており、矢穴が残る。外側から見える部分は平坦面を作り、裏側は一部の確認であるため、詳細は明らかではないが、鋭角に削り出している。

構築方法は、まず西側低地部分に約1.5mの幅に5石程度の石敷を施す。石敷は、平坦面を上面に向け、耕作土直下の明黄褐色粘土に埋め込み、不陸が生じないよう築成されている。石組は、石敷の東側端部に重なるように約35～50°の傾斜角で6石前後の石を築成する。石葺は、石組の東側端部に乗せるよう馬踏の西側に3石程度を施し、平坦面を上面に向ける。

馬踏の西側、石葺に接して現在は使われていないNTTの旧通信ケーブル管、東側の傾斜面には、乙限へと給水している防火水槽用の水道管が南北に入っている。調査区北側には、東側の畠から農業用水送水用のコンクリート製土管が入り、大きく搅乱を受けている。

石敷面から石葺までの比高差は約1.5m（5尺）を測る。傾斜角は西側で40°、東側は35°前後である。

なお、出土遺物は、いずれも石組埋土から出土しており、野越堤構築時期を示すものではない。

#### 2) 構造

##### 馬踏

現道路下で検出した道路遺構である。現況で幅2.4m、南北長44.5mで南北ともに調査区外に延長する。北側についてはNTT通信ケーブルが埋設されているため、検出していない。当初は石の混入しない馬踏として機能していたと考えられる。

検出面では碎石が見られるが、トレンチ調査の土層観察の結果、当初は石が取り除かれていたようである。後世の舗装の際に混入したものである。

標高は18.4mを測る。搅乱のため不明瞭ではあるが、馬踏の西側に接する石葺天端と同一レベルと考えられ、東側は緩やかに傾斜したあと、急激に落ち込み、緩衝部となる。

##### 石葺

馬踏の西側に設置された3～4石分の石葺遺構である。馬踏から肩部まで幅1.0mを測る。天端は石

の平坦面を上面に向けて設置されており、全体はほぼ水平に設置されている。石は幅45cm、奥行25cm前後を測る。他の石組箇所と比べ、やや小ぶりな石材を使用している。石葺の東側は搅乱を受けているが、土層からは石の抜取り痕は確認できなかった。当初より3~4石分の幅であったと考えられる。

ただし、調査区南端付近では、搅乱の東側に石が検出されている。両翼は幅広の石葺があった可能性も考えられるが、現状では明らかに出来ていない。

### 石積

西側斜面に6石前後の石積で構築される。高さ22m、幅1.5m、傾斜角は35~50°を測る。平坦面を表に向いている。石材は幅50cm、長さ50cm前後を測る。一部の確認ではあるが奥行25cm程度となる。当初と考えられる箇所は布積みとなっており、後世の修復箇所は荒積である。第4図に示す。

### 石敷

石積の下に設置された幅5石分の石敷である。石敷東側の上面に石積が構築される。幅2.7m前後を測る。天端からの水落石としての機能をもち、越流水の水衝を防ぐ役割をもつと考えられる。

石材は平坦面を上に向けており、幅55cm、長さ35cm前後を測る。一部の調査ではあるが、石敷の下層には、基盤層である明黄褐色粘土層が広がる。石はこの粘土層に埋め込むように設置されていることを確認したが、湧水が激しく記録できていない。これにより石敷に不陥が生じず、安定した平坦面を保っているようである。

緩衝部東側は搅乱が著しく、端部が不明瞭であるが、約2.5m(8尺)幅の傾斜面と考えられる。

## 2. トレンチ

ここからは、各トレンチについて報告する。調査区南端にあたるトレンチAで野越堤を横断して掘削し、トレンチFは、トレンチA南側の石組上面堆積土を除去した状態である。トレンチAより北側では、緩衝部から馬踏をトレンチB、Cで掘削し、トレンチDは緩衝部および搅乱の掘削を行った。トレンチEは搅乱除去後の南壁である。各トレンチの位置は第3図に示す。

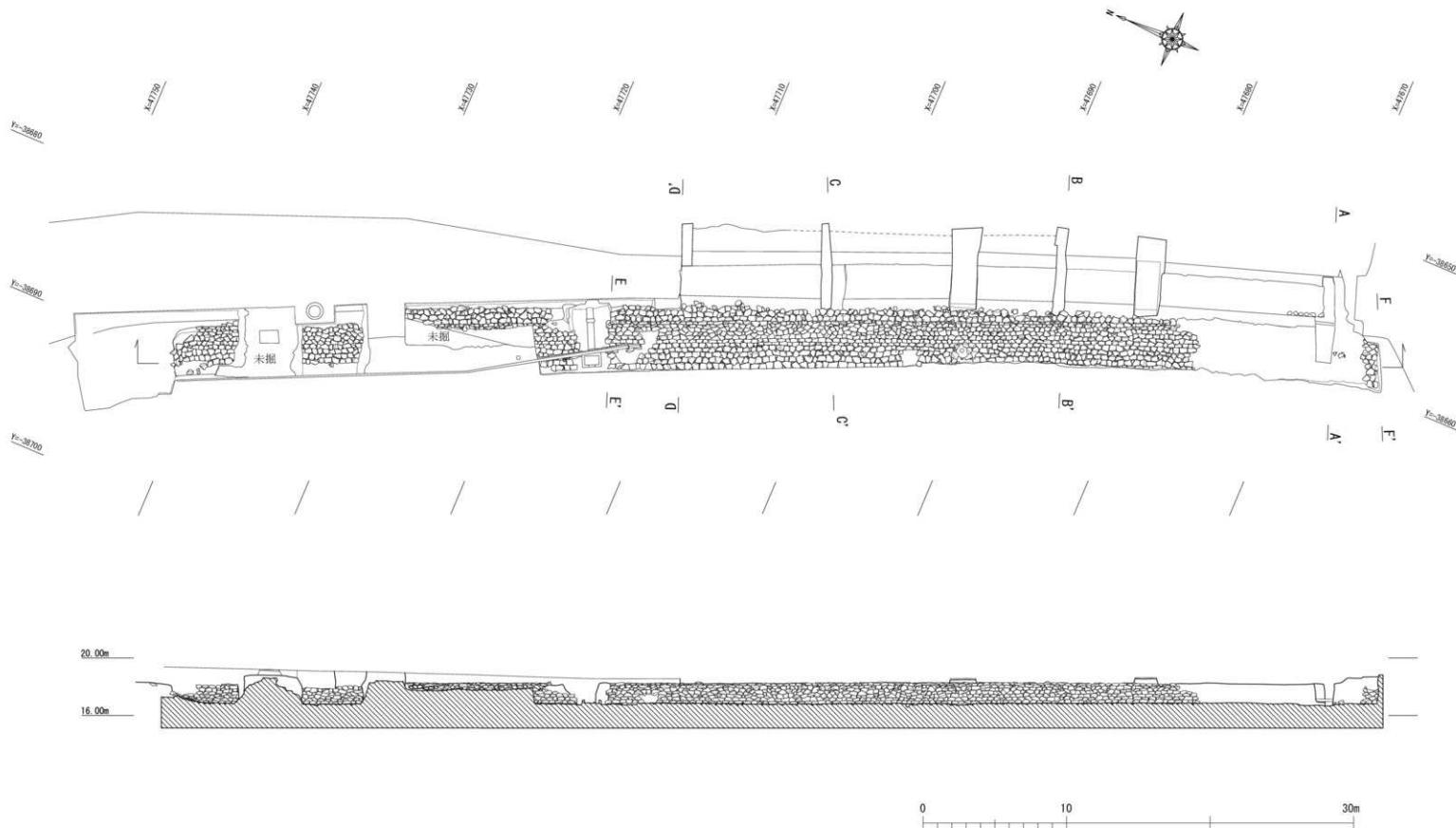
### トレンチA（第4図 A-A'）

干潟野越堤南端に設定したトレンチである。これより南側は交差点となっており、調査は実施できない。調査区南端より約6mで用水路および用水路にかかる「天道橋」に至る。

土層からは、明瞭な版築が確認でき、後世の改変は認められないことから当初の構築状況を表しているものと考えられる。

構築方法として、まず、地山を約3.6m幅で20cmほど掘り下げている。その後、第43、48層の粘土で両端を嵩上げし、第41層まで砂を充填している。この41層以下は、調査中も常に壁面から水が湧き出していた。第37層は粘土で、上面がほぼ水平となることから、この面で一度整地を行っているようである。第8~19層は砂と粘土の版築である。西側の第28~38層は、石組の裏込で粘質土と砂質土、混融砂を交互に構築する。石葺は既に失われているものの、第6層に石葺の抜取り痕が見られる。

東側の緩衝部は不明瞭である。第20層以下が緩衝部の構築と考えられるが、シマリは弱く、耕作土に近い質感である。搅乱により、版築部とのつながりは明らかにできなかった。



第3図 千渴京ノ坪遺跡 薩摩街道干渴野越堤 実測図 (S=1/250)

#### トレンチB（第5図 B-B'）

調査区南端より21.8m北側に設定したトレンチである。土層から後世の補修が行なわれていることが明らかである。

第1～12、15層は後世の補修跡と考えられる。第13、14、16、31層は、版築状をなすが、トレンチAと比較して、各層が厚い。第27～30層は裏込にあたる。現状、馬踏部分は疊の混入が多く、第3～6層以下が構築部であろう。したがって、馬踏は大きく削平されているものと考えられる。

#### トレンチC（第5図 C-C'）

調査区中央付近に設定したトレンチである。

トレンチBと埋土が異なっており、トレンチBの補修跡を切る。第1～14層が後世の補修跡である。第15～21、24～28層が構築部となる。

#### トレンチD（第6図 D-D'）

調査区中央北よりに設定したトレンチである。

馬踏の掘削は行わず、攪乱の除去までとし、東側斜面の確認を行った。第3、13層以下が緩衝部にある。ただし、上半部は攪乱により明らかでない。ここでは、緩衝部も版築で構築されており、南側のトレンチとは様相が異なる。

#### トレンチE（第6図 E-E'）

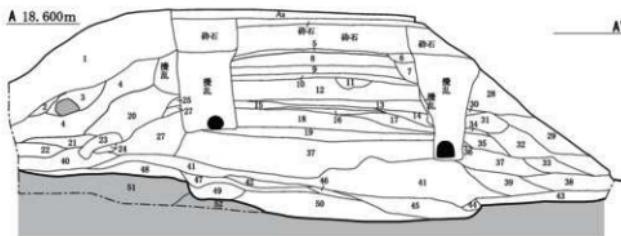
コンクリート管の埋設により、大規模な攪乱を受けていたため、南壁面の土層を確認した。馬踏については、調査を行っていない。さらに、裏込めが脆く、石組が崩落する危険があったため、裏込部分の精査は行えなかった。

ここでは、少なくとも3回の補修跡が確認できる。第1～6層および裏込部分、第7～13層がもともと新しく、やや構築が雑である。次に第15～19層で版築状を成すが、層は厚い。第14層は構築中に崩落した堆積土であろう。最後に第20～23層が該当する。版築状を成すが、トレンチAに見られる粘土と砂ではなく、ブロックの多く混ざる土を交互に積んで構築している。

#### トレンチF（第4図 F-F'）

調査区南端の石組上面の堆積土である。堆積の様子から、東側からの越流に伴う堆積と考えられる。第20～22層を見てみると、上層と比較して、堆積方向が逆になっている。これは、越流により堆積土が削られた結果であろう。西側は未掘であるため、詳細は明らかでないが、少なくとも第20層が堆積した1回目、第20層を削り、21層が堆積する2回目、21層を削り、22層が堆積する3回の越流が想定される。

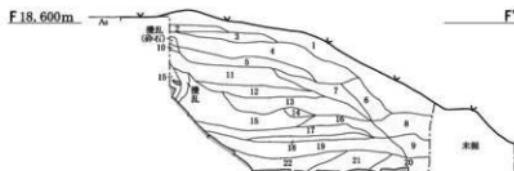
### トレンチ A



#### トレンチ A

1. 現代表土
2. 深灰色土
3. 深灰色土 (縫を少し含む)
4. 細粒土
5. 砂石
6. 淡灰色風化土 (石抜成)
7. 淡灰褐色風化砂礫
8. 淡黑色砂、黃白色砂、淡黃褐色砂の互層
9. 黑色土 (褐色土、黃褐色土ブロックをやや多く含む)
10. 黄褐色土 (褐色土、黄白色土ブロックをやや多く含む)
11. 淡褐色粘質土
12. 淡褐色風化砂質土
13. 淡黑色砂、褐色砂の互層
14. 淡灰色砂質土
15. 淡褐色砂土
16. 黄白色砂 (粒子粗い)
17. 淡黃褐色風化砂土
18. 黄色砂土
19. 黑色土 (褐色土、暗黃褐色土ブロックを多く含む)
20. 淡灰褐色風化土
21. 細粒土
22. 淡褐色粘質土
23. 淡灰褐色土
24. 淡灰褐色土 (褐色砂質土が混ざる)
25. 黄色砂質土
26. 淡黃褐色砂 (粒子粗い)
27. 淡褐色粘質土 (褐色土ブロックをわずかに含む)
28. 淡黃褐色風化砂
29. 黄褐色土
30. 淡褐色砂質土
31. 淡褐色風化砂
32. 淡褐色砂質土 (縫をわずかに含む)
33. 淡褐色粘質土
34. 淡褐色砂質土 (淡黃褐色砂を少し含む)
35. 淡褐色砂質土
36. 淡褐色粘質土
37. 淡褐色土
38. 淡褐色風化砂
39. 淡褐色粘質土
40. 淡褐色粘質土
41. 淡褐色砂
42. 黄褐色砂
43. 淡褐色粘土
44. 灰白色砂
45. 淡黃褐色砂 (軟分沈着、湧水あり)
46. 淡褐色砂
47. 黄褐色砂
48. 淡褐色粘土
49. 淡褐色砂 (軟分沈着)
50. 淡青褐色粘土 (褐色土粘土、暗灰白色粘土ブロックをやや多く含む)
51. 淡褐色粘土 (地山)
52. 淡青褐色粘土 (地山)

### トレンチ F



#### トレンチ F (調査区南端)

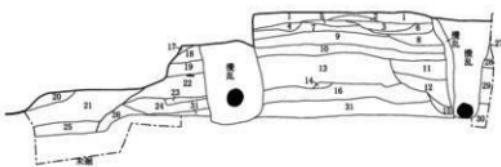
1. 黃土
2. 淡褐色土
3. 淡褐色風化土
4. 淡褐色土 (縫を少し含む)
5. 淡褐色土 (縫、黃褐色土ブロックを少し含む)
6. 淡褐色砂質土
7. 淡黑色土
8. 淡褐色土
9. 淡褐色土 (縫を少し含む)
10. 淡褐色砂質土 (黃褐色砂を少し含む)
11. 淡褐色土 (褐色土ブロックをわずかに含む)
12. 淡黃褐色砂質土 (褐色土、黃褐色土ブロックを多く含む)
13. 淡褐色風化砂質土
14. 淡褐色 (黃褐色土、淡黑色土ブロックをやや多く含む)
15. 細粒土
16. 淡黃褐色砂質土 (淡黃褐色土ブロックをわずかに含む)
17. 淡褐色砂質土 (褐色土ブロックを少し含む)
18. 淡褐色粘質土
19. 淡褐色粘質土
20. 淡褐色風化砂
21. 淡褐色風化砂質土
22. 淡青褐色粘土



第4図 薩摩街道干潟野越堤トレンチ A・F 土層図 (S=1/60)

### トレンチ B

B 18.600m

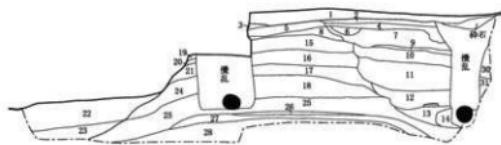


#### トレンチ B

- 1. 深褐色砂質土 (極めて固くシマル)
- 2. 赤褐色風化粘土
- 3. 灰褐色砂質土 (暗褐色土ブロック、砂をやや多く含む)
- 4. 淡灰褐色粘土
- 5. 灰褐色粘土
- 6. 暗褐色粘土 (灰黒色、明黃褐色粘土ブロックを多く含む)
- 7. 淡黄褐色粘土
- 8. 暗黄褐色粘土 (礫をわずかに含む)
- 9. 暗褐色粘土 (明灰褐色粘土ブロックを多く含む)
- 10. 純灰色混砂粘質土
- 11. 純灰色粘質土
- 12. 純灰色混砂粘質土
- 13. 純灰色粘質土と明黄褐色砂の互層
- 14. 黑色砂
- 15. 純灰色粘土
- 16. 黑色粘質土
- 17. 淡灰黑色粘質土

### トレンチ C

C 18.600m

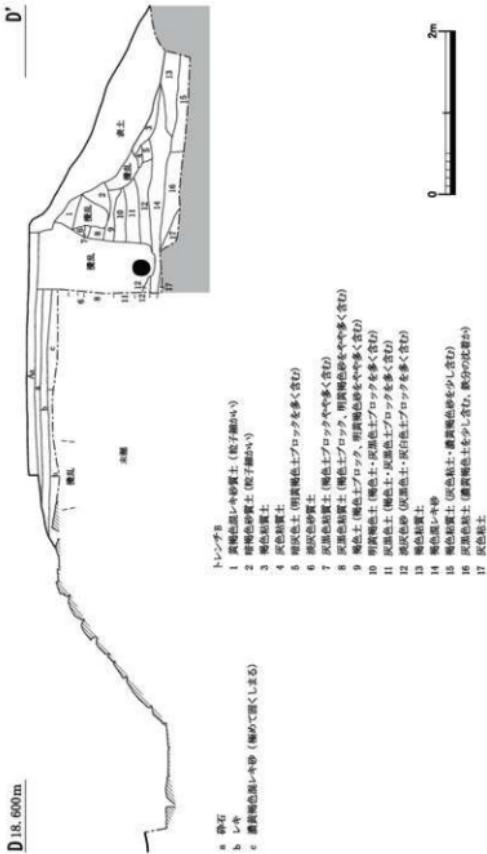


#### トレンチ C

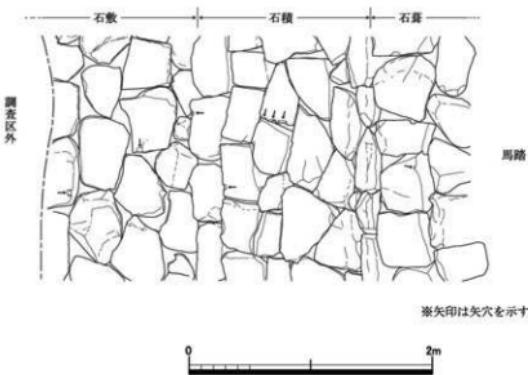
- 1. 黄褐色混砂土 (鉢石)
- 2. 淡黄褐色風化砂
- 3. 淡黄褐色風化土 (第2層と似る)
- 4. 淡灰黑色風化土
- 5. 灰黑色粘土と明黃褐色粘土のマーブル状
- 6. 黑色粘土 (礫を少し含む)
- 7. 黑色土 (暗褐色土、明黃褐色土ブロックを多く含む)
- 8. 暗褐色土 (明黃褐色土ブロックをわずかに含む)
- 9. 純灰色砂
- 10. 黑色土 (褐色の質土、明黃褐色土、褐色土ブロックを多く含む)
- 11. 黑色土 (明黃褐色砂、褐色土、暗褐色土ブロックを多く含む)
- 12. 黑色土 (黄白色砂ブロックをやや多く含む)
- 13. 暗灰色風化砂
- 14. 暗黄褐色土
- 15. 暗黄褐色風化砂
- 16. 黑色土 (褐色の質土、明黃褐色土ブロックを多く含む)
- 17. 灰褐色土 (暗褐色土ブロックをやや多く含む)
- 18. 淡灰黑色風化土
- 19. 淡灰黑色土
- 20. 黄褐色砂
- 21. 暗褐色土
- 22. 黑色土 (シマリ弱い)
- 23. 黑色粘質土
- 24. 純褐色土 (明黃褐色土ブロックをわずかに含む)
- 25. 純褐色粘土
- 26. 黄褐色砂 (粒子細い)
- 27. 淡灰黑色粘質土
- 28. 淡灰黑色砂
- 29. 淡灰黑色土 (明黃褐色土、暗褐色土ブロックを多く含む)
- 30. 黑色土 (黄白色砂、黄褐色土、褐色土ブロックを多く含む)
- 31. 黑色土 (暗灰色土ブロックを多く含む)

第5図 薩摩街道干潟野越堤トレンチ B・C 土層図 (S=1/60)

トレンチ D



第6図 薩摩街道干潟野越堤トレンチ D・E 土層図 (S=1/60)



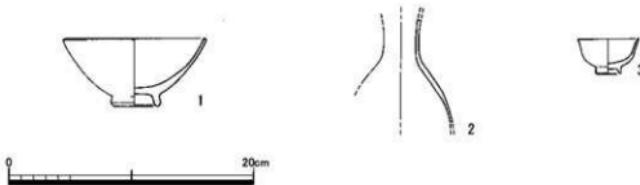
第7図 薩摩街道干渉野越堤石組実測図 (S=1/40)

#### 出土遺物 (第8図 図版11)

石垣検出中に表土中から陶磁器が出土している。以下にまとめて報告する。

1～3は磁器である。1は磁器碗で、復元口径11.7cm、器高5.5cm、高台径5.1cmを測る。外面口縁部や下側に2重圓線、体部に1重圓線が巡る。高台は踏ん張るように外傾し、疊付きは磨耗しており、露胎する。2は磁器小坏で、復元口径5.0cm、器高2.85cm、高台径2.0cmを測る。体部外面には文字が描かれるが判読できていない。3は磁器碗で、頭部から肩部が残存する。残存高8.4cmを測る。頭部は黄色釉がかかり、外面肩部以下に草花文が描かれる。

その他に図化していないが、陶器土管、青磁碗、陶器土瓶の注口部、器形不明のガラス製品1点が出土している。ガラス製品は、全容は不明だが、外面底部に「UKUO」の浮き掘りがある。全面乳白色を呈する。



第8図 出土磁器実測図 (S=1/4)

#### 遺物観察表

番号: 磁・磁器  
法量 = 口・口縁、高・器高、高台・高台径、( )は復元径・残存高

出土遺物	図版番号	図版番号	部種	法量cm (復元値)	形	胎土	構成	成形・調製	備考
表土	第図1	図版	磁・碗	口:(11.7) 高:(5.1) 高台:(5.5)	透明釉	粗良	良好	ロクロ水引	口縁外周に2重圓線 体部中央に1重圓線 胎部外周に燒ぼげの跡
	第図2	図版	磁・碗	口:(5.0) 高:(2.85) 高台:(2.0)	透明釉・馬路・青釉	粗良	良好	ロクロ水引	胎部下端に褐色釉、鉄斑か
	第図3	図版	磁・小坏	口:(5.0) 高:(2.85) 高台:(2.0)	透明釉	粗良	良好	型押しか	外面に文字を描く

## 第5章　まとめ

### 1. 薩摩街道

延宝6年（1678）には、薩摩街道（松崎街道）が開設した。元禄期（1688～1704）以前は、本郷町を通過する八町越えのルートが主であったようであるが、元禄15年（1702）以降、福岡藩主黒田氏と久留米藩主有馬氏の不和から、平方を北上し、松崎・乙隈を経由する冷水越えのルートに変更された。このことにより、久留米藩主にとって、干潟野越堤を通過する薩摩街道の重要度が増していったことが想定される。

文献史料からは、野越堤の記述を確認できていないが、『福岡県地理全誌九十七』には隣接する現筑前町の四三崎村「小富士川」の項に、「村ノ南ヲ過テ。筑後國御原郡干潟。乙隈両村界ニ入ル。長八百三十三間。幅八間。平水一尺。満水三尺」とあり、現在の草場川のことを示しているものと考えられる。そのほか、『筑後志』（p.14）には「久留米より松崎驛に至る三里二十一丁。松崎驛より御原郡乙隈村筑前國境に至る一里。此道は久留米より北の方、筑前境に至るの大路なり。」など本野越堤を通過する道の記述が見られる。

### 2. 干潟野越堤

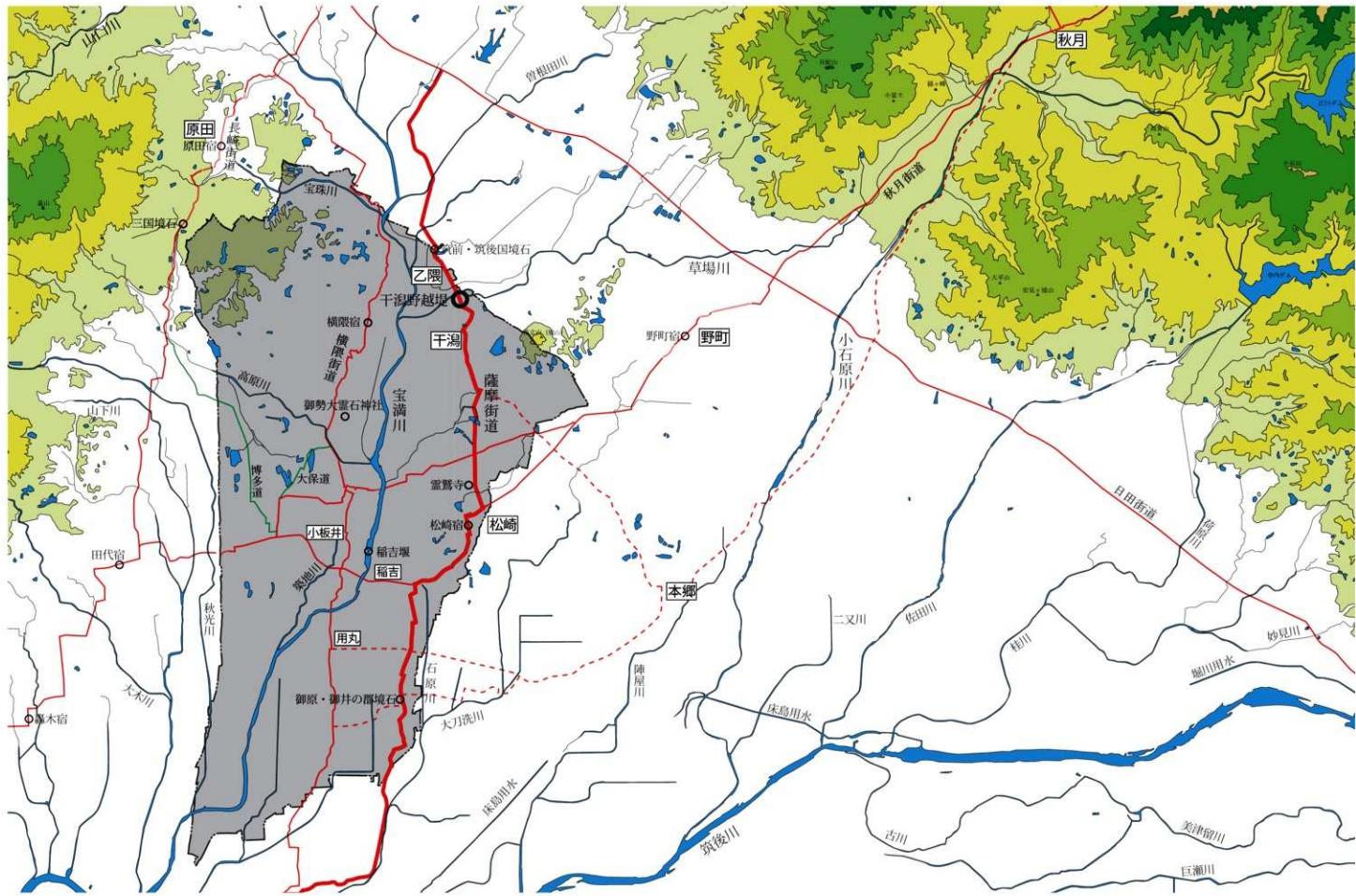
干潟野越堤は、北側には草場川を挟んで乙隈集落、南側には干潟集落があり、南北を台地に挟まれた草場川氾濫原の低地に築かれている。草場川の流れに直角に構築された横堤である。

草場川は、第9図の小郡市周辺水系図に示すように、筑前町弥永から延びる全長9kmにおよぶ河川である。現在は分流されているが、本来は秋月川の支流であった。山間部を通ることから、降雨の際の流量は、下流域つまり本堤付近で急激に増加することが想定される。本堤より上流域には強く屈曲する水術部が多く見られ、増水の際は流水の集中が発生していたものと考えられる。増水した河川の一部は遊水地などに流し込むことで水害を抑制することが可能であるが、本堤より上流側左岸域の耕作地は地形等から遊水地としての機能を併せ持っていたものと考えられる。

本堤より上流域に目を向けると、右岸側には未調査ではあるが、地形から羽衣堤と考えられる堤防が構築されている。その上流域には左岸側に霞堤があり、3重の治水施設をもっていたと考えられる。また、現在は失われているが、聞き取り調査の結果、霞堤の接続部分から下流域には石垣護岸が構築されていたようである。一方、本堤より下流の宝満川合流地点まではこうした治水施設は確認できない。これは、水術部がなくなることで、水流に急激な変化が見られなくなるためであろう。宝満川への流入量を調節していたものと考えられる。

本堤の最大の特徴は川に直行するように構築されている点にある。通常の遊水地内に構築される横堤である。構築方法は、基本的に地山である灰色粘土層に砂と粘土を交互に積み重ねた版築状で、石積みのある西側はグリ石と砂が混ざる裏込め構築される。

石組に見られる矢穴形状、大きさ、石積みの方法から江戸時代後半（18世紀代）の構築と考えられる。また、削岩ドリルの痕が残るものも見られることから、近代にかけて補修されていたのであろう。日本における削岩ドリルの導入は、明治10年（1877）に經營が開始された足尾銅山に始まる。小郡市内における削岩ドリルの導入時期は不明であるが、昭和3年（1928年）に作庭された平田氏庭園<sup>9</sup>の滝石組に



第9図 小都市周辺の主要街道および地形図・水系図 (S=1/60,000)

は削岩ドリル痕が見られる。この時期には小郡でも削岩ドリルが採用されていたことがわかる。

野越堤築造の詳細な時期は不明ながら、築造には、久留米藩の治水・利水の大家である丹羽頼母もしくは、その影響を強く受けたものが携わったと考えられる。頼母は、久留米藩初期から治水事業に携わっているが、寛文9年（1669）、竹野郡早田村に霞堤工法を採用するなど、治水技術の最盛期をこの頃に見ることができる。また、この年は松崎藩の陣屋候補地が選定された時期でもあり、松崎宿の整備が本格的に開始された時期である。頼母は、延宝2年（1674）2月に老来職を辞し、天和元年（1681）に没しているため、頼母が野越堤の構築に関わったとするならば、松崎宿の陣屋候補地の選定に関わった寛文9年から老来職を辞した延宝2年まで（1669～1674）の間に想定される。しかしながら、薩摩街道の成立は延宝6年（1678）である。

また、野越堤の石組技法からは18世紀後半頃の構築が想定されている。時期決定の根拠としては布積み技法と矢穴形状および規模のみであるが、1世紀近い時期差が見られる。松崎街道成立から野越堤構築推定時期まで空白期間があることは今後検討の必要があろう。

### 3. 石材

使用されている石材は、当遺跡から直線距離にして1.4kmに位置する、花立山山麓に分布する花立山古墳群の石室に利用された花崗岩と色合い、質ともに良く似る。この花立山古墳群の石室石材は、古くは稻吉堰の構築に利用されていたことが明らかとなっており、薩摩街道干渴野越堤の構築にも利用されていた可能性は十分に考えられる。

石材に残る矢穴跡を一部ではあるが計測している（第7図）。幅5.5cmのものが最大で、2.5cmが最小である。また、調査期間中、近隣で矢穴が連続する石材を確認した（図版10右下）。矢穴の幅は、ばらつきが大きく2.5～4.0cmを測る。したがって、この幅は同一時期のものと考えられる。なお、削岩ドリルは、径2.0cm、2.4cm、3.0cmの3種類が確認できた。

石材の一部には、墨書きが確認された（図版7～9）。既に判別が困難なほど薄くなっているものが多い。記号では○の中に二、○の中に十、△のほか直線が見られる。そのほか文字、数字が書かれたもののがわかる。ただし、これらが構築時に書かれたものか、石材が転用されたものか不明である。文字や記号の上下、向きは不揃いである。

このような石材に書かれる墨書きは、城の石垣にも散見される。構築に携わった石工集団の紋と考えられているが、類例は少なく詳細は明らかでない。

### 4. 聞き取り調査

現地調査中に行った聞き取り調査で、70歳の方から「子どもの頃、70歳くらいの祖母に、あそこ（干渴野越堤）の堰は抜ってはいけない」という話を聞いたことがあるそうである。また、近隣住民から「明治40年代生まれの祖父が洪水によって崩壊したのを見たことがある」という話も伺っている。

最後に行われた補修は明治末期から大正期であろうか。削岩ドリル痕と豆矢痕が混在している点から、明治末期と考えられる。昭和前半には既に野越堤の石垣が土で埋まっていたという話も伺っている。

調査区にかかる道路は、過去3回ほど拡幅を行っているようである。いずれも東側へと拡幅している。

昭和20年頃には草場川の堤防工事が行なわれ、堤防が1mほど高くなり、現在の高さになった。昭和

28年に発生した大規模水害の際には、草場川の下流、宝満川との合流地点付近（立野地区）で決壊が起きているが、野越堤は壊れなかったとのことである。その頃は大雨のたびに青年団が見回りをしていたそうである。

草場川のやや上流に目を向けると、左岸の霞堤との合流地点付近に石垣が存在していたことを周辺住民の方が記憶していた。昭和30年頃には崩れたそうであるが、ここは草場川の屈曲地点にあたる。

野越堤の南側には東西に流れる幅2mほどの用水路があるが、ここには「天道橋」がかかっている。現在はコンクリート造りの低い欄干が付いたアスファルト舗装の橋であるが、戦前は1枚岩の石橋であったそうである。戦車が通過した際に割れ、一時期は丸太の仮設橋になっていたことを周辺住民の方が記憶されていた。

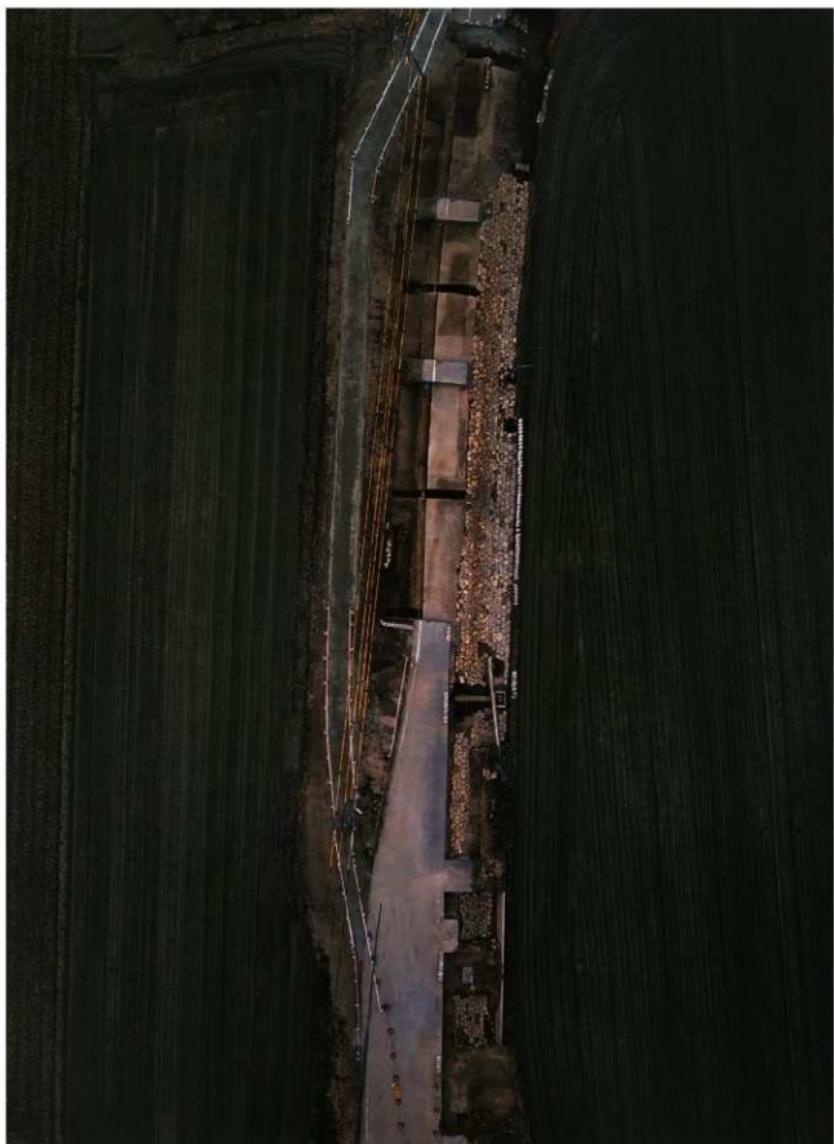
## 5. まとめ

野越堤の構築時期については明らかに出来なかったが、薩摩街道が成立した延宝6年（1678）以降、久留米藩主有馬氏が八町峠越えのルートから、松崎・乙隈を経由する冷水峠越えに変更した元禄15年（1702）までは、野越堤もしくはその前身道路が存在したことが想定される。干潟野越堤の精度・規模から久留米藩普請方による構築と考えるのが妥当であろう。聞き取り調査の結果から、明治40年（1907）年頃までは補修が行われていたと考えられ、約200年間にわたり維持管理されていた。

## 参考文献

龍孝明 2018 『平田氏庭園』（小都市文化財調査報告書第308集）

## 図 版



図版 1 薩摩街道千渕野越堤全景



1. 調査区遠景（草場川上流を望む）



2. 露堤（南から）

図版3



1. 石組全景（南から）



2. 石組全景（北から）



1. 馬踏全景（南から）



2. 馬踏全景（北から）

図版5



1. トレンチA土層（北から）



2. トレンチA土層（北西から）



3. トレンチB土層（北東から）



4. トレンチB土層（北西から）



5. トレンチC土層（東から）



6. トレンチC土層（北から）



1. トレンチD土層（南から）



2. トレンチE土層（北から）



3. 搅乱（西から）



4. 緩衝部（北から）



5. 石組北端部（北から）



6. 馬踏（北から）

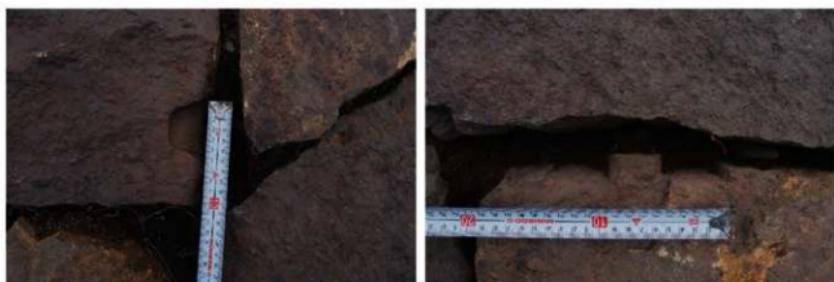
図版7





図版9





圖版 11



## 報告書抄録

ふりがな	ひかたきょうのつぼいせき							
書名	干潟京ノ坪遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第318集							
編著者名	龍孝明							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡255-1 Tel0942-72-2111							
発行年月日	2018(平成30)年3月30日							
ふりがな	ふりがな	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地							
ひかたきょうのつぼいせき	おごおりしひかた	40216		33° 25' 47"	130° 35' 03"	2016.11.11 ~ 2017.03.31	515.5m <sup>2</sup>	道路整備
干潟京ノ坪遺跡	福岡県小郡市干潟							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
干潟京ノ坪遺跡	近世以降の 単独遺跡 (薩摩街道)	近世 近代	薩摩街道 野越堤	陶磁器			薩摩街道を保護す る石組遺構	
要約	<p>参勤交代道として利用されていた薩摩街道および、街道を洪水被害から保護するための石組の野越堤が確認された。構築時期は明らかでないが、石組の構築技法、矢穴痕跡から18世紀代の構築と考えられる。</p> <p>使用されている石材は、市内の花立山古墳群の石室石材と色、質ともに似ており、これらが利用されている可能性がある。石組には記号や数字、文字といった墨書きの残るものもあるが、その多くは風食により薄くなっており、判読できない。</p>							

### 千潟京ノ坪遺跡

小郡市文化財調査報告書 第318集

2018年3月30日

発行 小郡市教育委員会

福岡県小郡市小郡255-1

出版 片山印刷有限会社

福岡県小郡市紙園1丁目8-15





